

# 「研究者の卵」 支援のための実態調査

○渡邊皓子、仲野安紗、森下明子、山本祐輔 (京都大学 学術研究支援室)

## 1. 「研究者の卵」 支援は無限の可能性を持つ！

「研究者の卵」、つまり大学院生もしくはポスドク、オーバードクターは、これまで京都大学URAの支援対象とはなっていなかった。しかし、彼らへの支援には多くのメリットがある。

- ☆最も生産性の高い若い世代が奨励金や研究費を得て、研究に集中できる環境づくりの支援
- ☆未来の研究者に対して URA の認知度が大幅に UP
- ☆未来への研究者への教育的な効果 (申請書の書き方のツボなど)

京都大学学術研究支援室では、「研究者の卵」支援を実現するため、まずは彼らの実態を把握し、ニーズを探ろうと活動を始めた。

## 2. 学術振興会特別研究員は「研究者の卵」最初の関門

学術振興会特別研究員 (通称ガクシン) は、大学院博士後期課程用の DC1, DC2 と、大学院を修了した者用の PD, SPD, RPD という区分に分かれ、採択されると給与と研究費が支給される。そのため、多くの「研究者の卵」が応募し、京都大学では毎年 1000 人以上が応募している。

そこで私たちはガクシンを取り掛かりとして、「研究者の卵」の研究費申請に関する実態調査を行った。調査は以下のように設計した。  
 ①動機編 (いつ応募を決意したか etc) ②情報収集編 (誰に相談したか etc) ③申請編 (いつから書き始めたか etc) ④環境編 (周囲に相談出来る人はいたか etc) ⑤主観編 (今となって思うこと etc)

## 3. アンケート実施方法

～回答率をあげる工夫もみえてきました～

アンケートは google form で作成し、メールで依頼  
 質問数：35、所要時間：10 分程度  
 回答期間：8 月 1 日～31 日  
 依頼総数：2042 名 (今年度と昨年度の申請者)  
 回答率：33% !

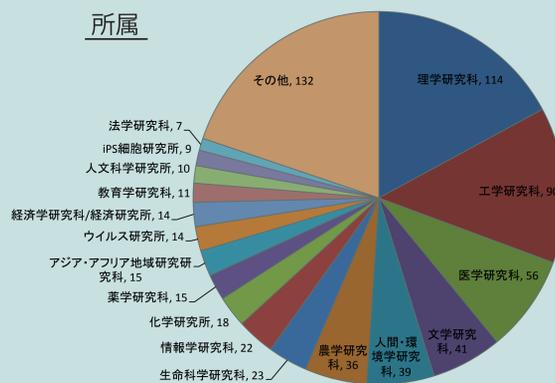
### 回答率をあげる工夫 1

メールの文頭には送信相手の名前を書く (「○○様へ」で始まるメールは、そうでないものより 15% も回答率が高い!)

### 回答率をあげる工夫 2

かしこまった (事務的) 文章よりも、やわらかい文体のメールの方が回答率がよかった

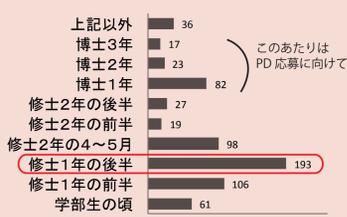
## アンケート回答者 666 名の属性



今年の 6 月にガクシンに申請したのは 666 名中 474 名。申請区分は  
 - DC1 30%  
 - DC2 40%  
 - PD 29%  
 - RPD 1%

特別研究員いずれかの区分で採択経験を持つのは全体の約 35%

## 4. アンケート結果解析 1 : 申請にいたる動機づけ



Q. 申請を決意したのはいつ?

→ DC1, DC2 については、修士 1 年の後半が最も多い  
 ※ただし博士後期課程へ進学を決める時期はもっと早く、学部生が多い



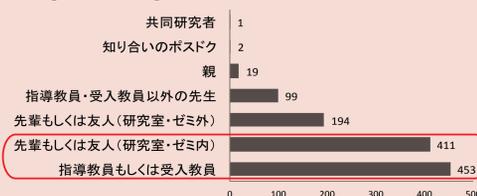
Q. 申請した理由はなに? [複数回答可]

→ 進学のための費用だけでなく、今後の研究者キャリアのための実績を積みたいという思いが申請者の約半数にみられる

## アンケート結果解析 2 : 情報の集め方



Q. 申請書作成の際の参考資料の集め方は? (上) また、相談した“人”は誰ですか? (下) [複数回答可]



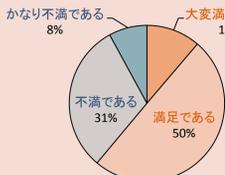
→ 申請書作成の参考に、過去の申請書サンプルを集めた人は 8 割に及ぶ

学内共有、一括で申請書サンプルを集めるプラットフォームをつくる?

→ 人に相談する際には、指導教員・受入教員と同じぐらい、同じ研究室に所属する先輩や友人に相談する人が多い

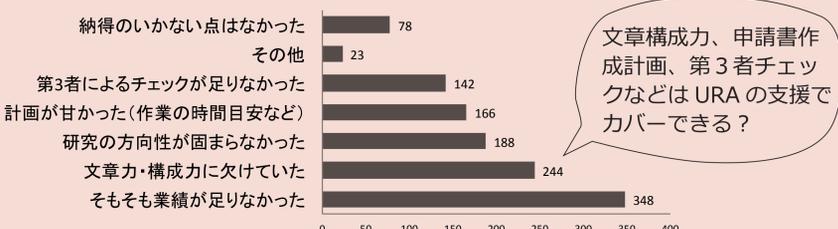
## アンケート結果解析 4 : 申請してみても

Q. 自分なりに満足いく申請書は書けましたか? [4 段階評価]



→ 「満足」あるいは「大変満足である」と答えた申請者は全体の 6 割。残り 4 割の方は不満が残ったようだ。

Q. 提出した申請書に納得のいかなかった点はありますか? その理由はなんですか? [任意回答、複数回答可]

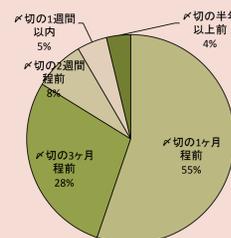


文章構成力、申請書作成計画、第三者チェックなどは URA の支援でカバーできる?

## アンケート結果解析 3 : 申請書作成

Q. 申請書の作成開始はいつ頃でしたか?

→ 全体の 8 割が、提出前 1 ヶ月～3 ヶ月前に申請書を書き始める



提出前の第三者チェック平均回数

- 指導教員 2.7 回
- 同じ研究室の先輩または友人 1.5 回
- 上記以外 1.5 回
- 合計平均 5.7 回

## 5. 次の展開は・・・

これからアンケート結果の解析をさらに進めて、どこに支援のポイントがあるかを探っていきます